

京都橘大学女性歴史文化研究所 第三〇回シンポジウム
「歴史の中の女性を読み直す―女性史研究のいま―」Ⅱ

日本中世女性史研究の軌跡

――脇田晴子・田端泰子氏を中心に――

細川涼一

はじめに

ご紹介に与りました細川です。よろしくお願いいたします。

今日は、いわば私の上司にあたったような先生方の名前が出てきますが、ここは客観的な史学史ですので、「さん」付けで統一して発表させていただきます。

日本における女性史研究は、一九八二年に脇田晴子さんが中心になって、女性史総合研究会編『日本女性史』全五巻（東京大学出版会）が刊行されることをひとつの画期として、それ以前と以後の二期に分けられるかと思っています。

そこで、それ以前を第一期として、戦前から戦後の一九七〇年代の女性史研究について述べますと、戦前から研究をされていた高群逸枝

さん、および戦後すぐに女性史の通史『日本女性史』を出された井上清さん、この二人の研究に収斂されると言ってよろしいかと思っています（高群逸枝全集第二巻・第三巻『招婿婚の研究』一・二、理論社、一九六六年。井上清『新版日本女性史』三一新書、一九六七年（初版は一九四八年）。高群さんの戦前からの研究が、戦後に集大成されていく。そして、戦後民主主義を背景にして、戦後憲法・民法における女性の地位が向上し、婦人参政権などができるなかでの（川島武宜『日本社会の家族的構成』学生書房、一九四八年。大塚英志「彼女たち」の日本国憲法」「彼女たち」の連合赤軍 サブカルチャーと戦後民主主義」角川文庫、二〇〇一年）井上清さんの『日本女性史』刊行ということになるわけです。

渡邊和行先生は先ほどの報告の中で、フランスでは一九七〇年前後の学生運動の高揚期に女性史に目が向けられていくというかたちでの画期を強調されました。日本でも運動面では同じ時期にウーマン・

リブ運動がありました。研究という面で言うなら、このウーマン・リブ運動は日本の女性史研究には同時代的影響はあまり与えていないと思います。日本史に関しては、この時期が歴史学の中で女性史研究が高揚した時期とは言えないだろうということで、時期が少しずれます。一九八二年に女性史総合研究会編『日本女性史』が刊行されましたが、これは同時に、一九八〇年代というフェミニズムの議論が高揚する時期とも重なっています。女性史研究が、この『日本女性史』によってアカデミズムの歴史学にも認知されたと言えると思います。

その中心にいたのが脇田晴子（一九三四～二〇一六年）さんで、脇田さんはフェミニズムの理論的中心にあつた上野千鶴子さんとも交流がありました。上野さんについては、先ほどの渡邊先生のご報告の中では東京大学教授として紹介されましたが、それより以前には上野さんは平安女学院短期大学・京都精華大学の教員として京都におられましたので、脇田さんの研究会にもよく来られていました。

このように上野千鶴子さんとも交流がありました。脇田さん自身は、フェミニズムの理論に積極的にリンクしていくというよりは、実証的方法に基づく女性史研究をアカデミズムの歴史学に認知させようということに主眼を置いたような気がします。

脇田さんが中心となつた女性史総合研究会編『日本女性史』は、おおかた好意的な評価で迎えられる。しかし、アカデミズムでの認知を主眼に置いたことと裏腹と言えなくもありませんが、高群さんが「女性の解放」をいうかたちで熱く女性史を語ったとするならば、それを「冷たい女性史、冷たい歴史学」というかたちでアカデミズムの

中に閉じ込めてしまったのだという、鹿野政直さんによる厳しい批判も寄せられました。ただ、脇田さんの主眼はそこにあつたということです。

では、現在はどうなのかと申しますと、本日のシンポジウムは「女性史研究のいま」が副題になっていますが、脇田さんらによって築かれた女性史研究の延長上にあると同時に、一方で女性史の「ゲッター化」も指摘されるということで、活発になっているというより、むしろ低調になっていると言えるかと思っています。

ですから、私の報告も、女性史研究のいままでについて総括することはできても、女性史研究の未来について語ることはしづらいというのが現状です。

一 黎明期の女性史研究——高群逸枝・井上清を中心に

以上のように、近代における女性史研究を二期に分けましたが、『日本女性史』全五巻が登場する以前の黎明期の女性史研究について、高群逸枝さんと井上清さんを中心にお話をしてみたいと思います。

戦後すぐ、戦後民主主義を背景として「歴史学は何をしなければいけないか」という議論があり、林屋辰三郎さんが『歌舞伎以前』の中で、民衆の歴史的生活を明らかにする三つのよりどころとして、女性史・部落史（社会の最低辺の民衆生活の歴史）・地方史の研究の必要性を強調されています（林屋辰三郎『歌舞伎以前』岩波新書、一九五四年）。これについては、先ほど渡邊先生も「卓越した示唆である」と言われま

した。

林屋さんは、女性史については、「すくなくとも民衆の歴史というかぎりは、その半数を占める女性の立場を考慮しなくては、ほんとうの民衆生活を理解できるものではない」と述べられています。

林屋さん自身は、女性史の研究で本を出したというよりも、部落史の分野で大きな足跡を残されました。まさに『歌舞伎以前』自体がそうかと思っています。ただ、『歌舞伎以前』という書名からも想像できるかと思いますが、女性芸能者としての出雲阿国を高く評価するといったかたちでの女性への目配りはあると思います。

このようなことが戦後しばらくして林屋さんの提言としてあるわけですが、具体的に女性史の研究について言うならば、それ以前の戦前から仕事をされていた高群逸枝さんの研究と井上清さんの女性史の通史になると思いますので、次にこの二つについて触れておきたいと思っています。

高群さんの研究に触れておくというのは、脇田晴子さんが中世女性史の構築を試みようとした際、それより以前に通史として立ち回っていたのが高群女性史であったという側面もありますので、大事な面としてみておきたいと思っています。

高群さんの女性史は、いろいろ複雑な論述がありますが、きわめて簡単に述べるならば、原始時代に母権とともに高かった女性の地位が、南北朝期を画期とする家父長制家族、すなわち嫁入婚の成立と、それに伴う女性財産権の喪失によって低下し、女性が男性に従属するようになった、ということになります。

高群さんは、戦前からアナキズムの運動などもするなかで、自分が生きている近代社会において女性の地位はなぜこんなに低いのだろうという疑問から出発して、女性の地位が低下した歴史の解明へと進んだのですから、そういう一種の下降史観の中で高群さんが希望を見いだしたのが原始社会です。原始母系制社会においては女性の地位は高かったけれども、それがだんだんと低下していく。その分水嶺が中世の南北朝時代である、ということになっていくわけです。

のちの研究者としては、「原始・未開の自由」の中世社会における残存と、南北朝期を分水嶺とする「文明」社会の確立のなかでの「原始・未開の自由」の衰退を説く、網野善彦さんの「無縁」論も、理論としてはほぼ同じ考え方です（網野善彦『増補無縁・公界・楽』平凡社、一九八七年）。「原始・未開の平等」と「文明」社会のなかでの差別の成立というかたちで、人類史を二つに分けて考えるという点では高群さんと網野さんの考え方は似ている面もあると思います（この点をめぐっては、永原慶二「女性史における南北朝・室町期」『室町戦国の社会』吉川弘文館、一九九二年、参照）。

この原始母系制社会の理想化は、運動の立場でいえば同時代の平塚らいてうさんが自伝の書名に、「青鞥」発刊の辞から『元始、女性は太陽であった』と付けています（平塚らいてう『元始、女性は太陽であった』平塚らいてう自伝 上、大月書店、一九七一年）。「青鞥」発刊の辞ではその後に「今、女性は月である」と続くのですが、このようなかたちで「母性が尊重された原始時代には女性は光り輝いていたのだ」として、母性保護運動をおこなった平塚らいてうさんと高群さんは共通

する面があると思います。

そのようなかたちで高群さんの研究が成り立つわけで、高群さんが女性の地位低下の指標として考えたのが、婚姻制の変化(招婿婚から嫁入婚へと婚姻制が移行する)と、女性財産権がだんだん制限されていき、消滅していくという二点でした。

これに対して、井上清さんの『日本女性史』は、戦後マルクス主義史学の立場からの女性史の通史です。前提としてあるのはエンゲルスの『家族、私有財産および国家の起源』であり(エンゲルス、村井康男・村田陽一訳『家族、私有財産および国家の起源』大月書店国民文庫、一九五四年)、ほぼその理論を日本史に当てはめたと云ってよろしいかと思えます(はかに、バーベル『婦人論』の影響がある。バーベル、伊東勉・土屋保男共訳『婦人論』上巻・下巻、大月書店、一九五八年)。

これはいわゆる社会の発展段階論で、原始共產制(母系氏族制)社会の時代は家長権が弱く、ある意味で男女平等だったけれども、階級社会(古代どれい制社会)が成立するなかで、原始の平等な社会から、支配する貴族と支配される奴隷的人民とに分裂した。そのとき、すでにその貴族社会の女性は自由を失い、女性の地位もこれとともに低下する、というかたちになるわけです。

高群さんとの違いを一言で言えば、高群さんは母系制社会をわりあいの後の時代まで引つ張って、中世前期まで母系制の残存を強調したのに対して、井上さんは古代どれい制の成立と母系制の崩壊を律令国家(古代天皇制国家)の時代に求めました。律令国家の時代を奴隷制社会と規定する古代史の研究者は現在はまだ多くないと思いますが、戦

後すぐの時期には通説といつてよい見方であり(たとえば、門脇禎二・黒田俊雄『テキスト日本史』上、三一新書、一九五八年)、井上さんはそれによつて女性の地位も低下したとみるわけです。

これが中世封建制Ⅱ農奴制社会へと転換するなかで、井上さんの立場は支配者の退廃とそれに対する働く民衆の精神的健康を階級対立として対比して描きますから、「宮廷女性は男性貴族のなぐさみものにされ、貴族階級全体とともに、無能力、無気力になってゆく」というように、否定的に評価したうえで、それに代わって、民衆女性を背景にして、新しい(と、戦後のこの時代には考えられた)武士階級の自主性の強い女性があらわれるということで、その典型的な例として北条政子をあげているわけです。

井上さんが女性史の通史を書いた時期は、石母田正さんによる領主制論が全盛で(石母田正『中世的世界の形成』岩波文庫、一九八五年)、井上さんは近代史の研究者ですから、中世について個別研究があるわけではありませんでした。そういうなかで、理論的には中世社会の理解は石母田説に依拠していましたから、中世を担う新興の武士階級の女性としての北条政子などを評価するわけです。

そして、いまお話ししたことと同じですが、井上さんは民衆社会における精神的健康を為政者の退廃に対置しますから、「民衆社会では、その勤労生産と闘争の同志として、女はほかのいかなる階級におけるよりも、男にたいして自主性をもっていた」と、室町時代の狂言などを例にして述べています。

二 脇田晴子の女性史研究と女性史総合研究会編

『日本女性史』の刊行

このように、脇田晴子さんらが女性史の新しい構築を試みたときに、その前にあった研究というのはほぼ高群さんと井上さんに集約されていました。そこで次に、脇田晴子さんの女性史研究と、女性史総合研究会編『日本女性史』全五巻（東京大学出版会、一九八二年）が日本における女性史研究のひとつの画期だと思えますので、その刊行についてお話ししたいと思います。

先ほど私は、脇田さんが女性史研究と関わった原点を回想していることを述べました。戦後、働く人たちのグループによる読書会があちこちで行われたりしまして、女性の読書グループが井上清さんの『日本女性史』と高群逸枝さんの女性史の本を読んで学習するのに、まだ京都大学の学生だった脇田さんが歴史を学ぶ立場から質問に答えるチューターとして通ったことがあったそうです。それが自分が女性史研究を志すひとつの原点になっている、ということ『日本中世女性史の研究 性別役割分担と母性・家政・性愛』の「後記」で述べています。脇田さんの女性史の本は、論文集としてはこの『日本中世女性史の研究』にまとめられています（脇田晴子『日本中世女性史の研究』東京大学出版会、一九九二年）。

脇田さんは、最初は商業史の研究から入りまして、次いで京都を中心とした都市論に取り組まれ、それぞれ一冊ずつ論文集にまとめた後

（脇田晴子『日本中世商業発達史の研究』御茶の水書房、一九六九年。同『日本中世都市論』東京大学出版会、一九八一年）、女性史研究で三冊目の論文集を出されましたが、以前からやってきた商業発達史や都市論と違って、「女性史研究は、胸を貸してくれる人が全然無いわけ。井上清さんや高群逸枝さんの本はあるけれど、時代がかなり古くなっている。だから女性史というのは（やっていくのが）しんどいですよね」と、インタビュに答えるかたちで述べられています（長志珠絵・京樂真帆子聞き手「女性史研究と私―脇田晴子氏に聞く―」『女性史学』二二号、二〇一一年）。

歴史学はアカデミズムとして見た場合、どうしても頑迷な部分がありますから、脇田さんは女性史には若い頃から興味を持っていましたが、初めから女性史の研究者として出発するのではなく、まず商業史などの分野で研究者として自己を確立させ、それから女性史をやらないうと、なかなか女性史がアカデミズムの歴史学に認知されない。この時代の歴史学はそうだったということで述べさせていただきますが、まだまだ脇田さんが研究者として出発した時代はそういう状況でした。ですから、そういう順番で仕事をされたわけで、「私が女性史について初めて一般的なものを書いたのが一九七七年、研究覚書のようなものを書いたのが七八年。そして、本書に収録したもののうち、最初のもの（『日本女性史』第2巻中世に書いた「中世における性別役割分担と女性観」―引用者）が八二年であるから、本書はせいぜい十余年の成果にすぎない。しかし、私がいつか女性史をやりたい、やりたいと思っていたのは、学生時代からのことであるので、このようなものでもやっ

と一書をまとめたとすると、いささか感慨を覚えざるをえない」と、『日本中世女性史の研究』の「後記」に書いています。

そういうことです。から、脇田さんの研究履歴を述べるなら、商業史、次いで京都を中心とする都市論というふうに研究者として自己を確立したのち、女性史研究を女性史総合研究会編『日本女性史』としてまとめられたのが一九八二年、そして個人の論文集をこの分野で刊行されたのが一九九二年ということになります。

私は、『日本女性史』全五巻が刊行された一九八二年当時、まだ大学院生として関東におりましたので、この時期のことは直接には知りません。この時期については、脇田さんと一緒に研究に取り組まれた西野悠紀子先生がこの後で具体的にお話ししてくださいと思いますが、この刊行の意図について、「いささか孤立した存在であった女性史を歴史学の中に位置づけ、女性史学そのものの発展を図るとともに、歴史学を充実させることになった」と、『日本女性史』のシリーズに次ぐかたちで、やはり脇田さんなどが中心になって編まれた『日本女性生活史』の巻頭言の中で回想されています（脇田晴子文責「刊行にあたって」女性史総合研究会編『日本女性生活史』第1巻原始・古代、東京大学出版会、一九九〇年）。

では、脇田さんの女性史研究の意味が、高群さんや井上さんとうどう異なり、どこにあるのかについて述べたいと思います。

脇田さんの論文集としては『日本中世女性史の研究』を見ればいいのですが、高群さんの女性史と井上さんの女性史、ことに高群逸枝さんの『招婿婚の研究』における、原始時代に母権とともに高かった女

性の地位が、南北朝期を画期とする家父長制家族Ⅱ嫁入婚の成立と女性財産権の喪失によって低下し、女性が男性に従属するようになったとする「通説」（この時期には女性史の研究は高群さんの研究しかなかった）ので、高群説が「通説」でもありました）を批判することで、新しい中世女性史の通説を描こうと企図したものだと言えるといます。

すなわち、高群女性史にあつては―井上女性史も古代・どれい制社会の成立とともに家父長制家族が成立しているのですから中世には同じということになりますが―家父長制家族の成立とともに女性の地位が低下したと言われることが本当なのか、それを実証したいというのが脇田さんの意図でした。

これは、脇田さんに続く田端泰子さんの女性史にも共通する面かと思えます。すでに中世の「家」が成立した後で女性の地位が低下したと言われるけれども、本当にそうなのかということを問い直したのが脇田さんであり、そして田端さんもそういうことになるのだろうと思います。

脇田さんは、高群さんが女性史にかけた情熱を高く評価しながらも、高群さんの女性史では、女性は「産む性」であること、すなわち母であることによって原始時代は地位が高かったとあるので、女Ⅱ自然だということ、それに対して男性Ⅱ文明であるというふうに、男女を分けてしまう図式につながって、女性Ⅱ自然Ⅱ原始Ⅱ出産・育児とその機能がもたらす効力という呪縛から女性史は抜けきれないものとなると指摘します。

それでは、高群さんによって女性の地位が低下する分水嶺とされた

嫁入婚による中世の家父長的な「家」の成立の問題が、脇田さんによつてどのようにとらえ直されるのかをみてみたいと思います。

高群さんが女性の地位の高さと結びつけて説明する妻問婚の時代は、通いの時代で、女性の地位が高かったということについて、脇田さんは、『かげろふ日記』の著者と藤原兼家の事例にみられるように、王朝時代の妻問婚は一夫多妻多妾制であり、夫婦関係は不安定であつたと述べています。この妻問のなから一人の女性のところに婿となつて住みついて、その住みついた家の妻が正妻になりますが、それは妻の父の甲斐性によるものだった。要するに、女性の地位が高かつたのではなくて、複数の女性のもとに通うなから正妻ができてくる。その正妻になつた女性というのは結局、父親の地位が高い貴族の娘ではないか。つまり、妻の地位は父の甲斐性によるものであり、もつと古い時代はともかく、少なくとも平安時代の貴族の妻問婚は女性の地位が高いものとは言えない。

しかし、嫁取婚（高群さんにあつては女性の地位が低下する大きな画期となるものは、女性が生家を出て、他人の「家」に嫁として入るけれども、その家の正妻としては一人である。すなわち、嫁取婚によつて一夫一婦制が確立するのであり、もちろん多妾制を含むとはいへ、正妻について言うならば一夫一婦制の確立をもたらし、中世的な嫁取婚の「家」によつて正妻の地位はむしろ安定したのだ、と脇田さんは言うわけです。これが高群さんへの反論のいちばん大きい点と言えるかと思ひます。

このような中世的な「家」の内部の運営は、妻の母性（「家」の後継

者を産む再生産機能）や家政能力によつて統括されているから、ナンバー一は家長かもしれないけれども、家政の統括者としての正妻の権限は、ナンバー二とはいへ、ある意味では高かつたのだ、というようなことを脇田さんは言うわけです。

脇田さんは女性史の研究以前から商業史の研究もしていました。そうした研究も生かしながらということになると思いますが、前近代の「家」は生産の単位であると述べています。これは少し抽象的なことを述べているかと思いますが、現代の家族は消費の単位であつても、必ずしも生産の単位ではありません。

つまり、現代の「家」は、夫婦で共働きしているとしても、夫が働く会社と妻が働く会社は別々で、そういうかたちでそれぞれが稼いだお金を持ち寄ることで成り立っている。夫婦が持ち寄つたお金で、「家」の生計が成り立っている。その意味では、現代家族の「家」は消費の場でしかなくなつていくことになります。現代家族における唯一の再生産機能は（即物的な言い方になりますが、脇田さんがそういう言い方をしているので申します）次世代の再生産、すなわち子どもを産んで育てることはあるけれども、それ以外は消費の機能しかない。

ところが、前近代の「家」は、「家」自体が生産の場である。要するに、農家などでは近代になつても一家総出で農業経営を行うことで、家業である農業が成り立っている。商売をやっている家でも、例えば八百屋さんでは夫が市場で野菜を仕入れてきて、それを妻がお店で売る。いわば夫婦協業で八百さんが成り立っているという意味では、「家」は生産の単位です。

そういう生産の単位としての「家」は、前近代にあつて、近代のある時期まで続いてきたけれども、現代社会の「家」は消費の場でしかなくなる。「家」に生産の単位としての機能がなくなるなかで、妻の側が経済的にもきちんと自立できれば、もう夫婦が一緒にいる必要はないということ、当然ながら離婚率も高くなります。

では前近代がいいのかと言えば、前近代にも離婚はありますが、生計をともにするから別れられないという違いはあるだろう、ということとで脇田さんは前近代の「家」の生産の場、経営体としての機能を強調したわけです。

ただ、脇田さんは目配りのある人で、先ほど私は正妻の地位が高いということを言いましたが、しかし中世では、結婚して夫婦で「家」を形成するのは特権であり、「妻の座」を獲得できなかった女性は召使として「家」の枠内に入ったり、「家」からはじきとばされて尼寺に入ったりし、一方で娼婦としての遊女がありました。前近代では男女差よりも身分差が強く、男性の場合も同様で、同一身分のなかで初めて男女差が顕現した、ということを行っています。

脇田さんの目配りの広さということで言えば、正妻の事例として、中世の「家」における女性の地位の高さを主張し、それで高群説を批判するわけですが、一方で暗部と言えいいのか、正妻になれる女性たちがいるということにもきちんと言及されています。

このようなかたちで、女性の地位は家父長制家族が成立した後でも決して低くはないということを、高群説に対して主張したというのが、脇田さんの女性史の意味の最大の点になるかと思っています。

三 脇田晴子による中世女性の分類

脇田さんは中世女性を大きく三つに分類します。一つは「家」の妻など、「家」に含まれる女性、二つめは「家」を出てしまう女性として、尼となつて僧籍に入る女性をあげています。

尼にも二種類あつて、本当に「家」を出てしまう尼寺の尼もいれば、夫の死後に尼姿になることによって再婚しないことを宣言して、その代わりに夫の財産を譲られる後家尼の女性もいますから、後家尼姿は脇田さんが述べる一面だけでなく、女性が夫の死後に婚家において一つの地位を築くために逆に尼姿になるという事例です。ですから、尼姿を「家を出てしまった女性」とみるのは個人的には少し早計すぎる気がします、とにかく「家」から出た女性として尼を位置づけました。

頼朝死後の北条政子がまさに後家尼の事例です。彼女は將軍家の後家尼として君臨し続けるわけで、三代將軍実朝が一二一九年に死んだ後、九条頼経が四代將軍になるのは一二二六年です。その間、誰が將軍の役割を担っていたのか。一二二五年に政子が死んだことによって四代將軍九条頼経が誕生するということで言えば、事実上、政子がほぼ將軍と同じ地位にあつたと考えることができます。後世に「尼將軍」と言われるのは、たしかにそのとおりです。

つまり、政子の場合、尼姿をとることによって婚家の家長としての力を振るい続けたわけです。これに典型的にみられるように、尼は

必ずしも「家」を出るとは限らないということを注釈として言っておきますが、脇田さんは「家」を出た女性として尼を位置づけています。三つめは、遊女や傀儡子・巫女・白拍子・曲舞など芸能にたずさわる女性です。三つめの女性については、早い時期には売買春に携わらざるを得なかった女性というかたちで分類しましたが、脇田晴子さんご自身、お能をされていて、自らシテとして能舞台に立たれることもあり、のちには芸能としての面を強調したくなったのか、「芸能にたずさわる女性」というかたちで分類しています。

脇田さんの女性史に関する論文集としては一冊ですが、一般向けの本も二冊書いています(脇田晴子『中世に生きる女たち』岩波新書、一九九五年。同『女性芸能の源流 傀儡子・曲舞・白拍子』角川書店、二〇〇一年)。これを三分野に当てはめるならば、論文集『日本中世女性史の研究』は三分類すべての女性を扱った総論にあたり、一般向けの二冊のうち、岩波新書の『中世に生きる女たち』は一つめの「家」に包含される女性を中心に二つめの尼までを扱い、『女性芸能の源流 傀儡子・曲舞・白拍子』は副題どおり、三つめの芸能にたずさわる女性になるかと思っています。

このようななかで、これは脇田さんだけではないのですが、『日本女性史』の講座が「性別役割分担」という概念を導入します。特に脇田さんは、もともと商業史から出発していますので、女性の商工業者に注目しました。女性がけっこう商工業に携わっているということを、脇田さんは強調されるわけです。

高群説でも井上説でも、民衆の精神的健康を強調する点は別として、

中世社会は女性にとって暗黒の時代だったということになりますので、それ以前の高群さんや井上さんの中世を暗黒の時代として描く女性像に対する一つのアンチテーゼを脇田さんは提出したことになるかと思っています。

四 田端泰子氏の中世女性史研究

最後に、田端泰子さんの中世女性史研究についてお話ししたいと思います(田端さんの中世女性研究をめぐる研究史的な整理としては、西尾和美「田端泰子氏と中世女性史研究の現在」『京都橘大学女性歴史文化研究所紀要』二〇号、二〇一二年、がある)。

田端さんは、脇田さんが商業史から出発したとするならば、中世村落史の研究者として出発しています(田端泰子『中世村落の構造と領主制』法政大学出版局、一九八六年)。女性史総合研究会編『日本女性史』第2巻中世所収の「大名領国規範と村落女房座」で女性史研究を始められました(のち、ほぼその内容は、最初の女性史の著書である、田端泰子『日本中世の女性』吉川弘文館、一九八七年、に吸収)。以後、女性史と村落史が田端さんの二つの柱となり、最新の著作が『日野富子』です(田端泰子『日野富子』ミネルヴァ書房日本評伝選、二〇二二年)。

この本は、評伝選ということからもわかるように、日野富子の伝記的研究ですが、山科七郷の村落住民たちの富子(室町幕府)の政治に対する動向を描くというかたちで、村落史と女性史が合体するかたちでの歴史叙述の成果になるわけです。

田端さんは、女性史関係の著書がたくさんありまして、単著だけでも一三冊ありますが、最後に田端さんの中世女性史研究の特徴をまとめるかたちでこの報告を終えたいと思います。

田端さんは村落史研究から女性史研究に入りましたので、都市史研究から女性史研究に入った脇田晴子さんとの分業関係を想定されていたようでありまして、最初の女性史に関する論文集である『日本中世女性史論』の中で「主として都市に住む天皇家や公家の女房、商業にたずさわる女性、芸能者としての女性に関心が深い脇田晴子氏と、村落に住む女性や庶民階級の女性を研究対象とする私は、大まかな役割分担」をしているという意識があるのも事実である」というかたちで、脇田さんとの関係を述べています(田端泰子『日本中世女性史論』塙書房、一九九四年、「あとがき」)。

ただ、その後にたくさん女性史の本を出されるなかで、女房、乳母、特に武家の女性などは研究がけっこう深まります(田端泰子『日本中世の社会と女性』吉川弘文館、一九九八年。同『乳母の力』吉川弘文館、二〇〇五年)。先ほどの渡邊先生の西洋史・フランス史の女性史研究のご報告のなかでも、かつて女性といえば政治的に無能力者として位置づけるような偏見があったと述べられましたが、日本史においてもそういう考え方がなかったわけではありません。それに対して田端さんは、中世の女性が政治に果たした役割を、中世の頂点的女性と言ってもいい、北条政子や日野富子の伝記を書くなかで強調するわけです(田端泰子『幕府を背負った尼御台 北条政子』人文書院、二〇〇三年。同『日野富子』。それまで日野富子などは、いわゆる悪女としてのイメージが強かつ

たのですが、夫の足利義政が酒におぼれて政治的な意欲を失っていたなかで室町幕府を切り盛りしたのは將軍家における「健全な成人」としての日野富子であった、ということを強調されています。応仁・文明の乱を終結させたのも日野富子の財力によるのだ、ということも強調されています。これについては、私が『女性史学』三二号(二〇二三年)に書いた田端さんの『女人政治の中世 北条政子と日野富子』(吉川弘文館、二〇二二年(再刊))の書評・紹介の中で、田端さんの女性史研究の特徴として触れておきました。田端さんは、女性の政治的役割・政治的能力を高く評価するわけです。

そして、武士の「家」は、家内の管理を妻がして、夫と妻の協力のもとに外と内との役割分担がなされ維持されていたとして、田端さんは「性別役割分担」という言葉を肯定的に使いました。この言葉は、女性史やジェンダーの研究者の中でも、優位な位置にいる男性が女性に性役割を押し付けたのが性別役割分担であるというかたちで使う人が多いと思いますが、田端さんはプラスイメージとして「性別役割分担」という語を使われるのです。この点は特徴かと思っています。

また、女子相続の消滅を前提として、女性の地位が低下した時代とされた戦国時代について、女子に所領が永代譲与されたり、一期分所領が与えられるなど、女子の相続権が残存していたことを強調されます(田端泰子「戦国期女性の役割分担―経済活動と財産相続―」女性史総合研究会編『日本女性生活史』第2巻中世、東京大学出版会、一九九〇年。のち、同『日本中世女性史論』所収)。

女性の地位が低下した最たる時代、政略結婚や人質になるなど、女

性には人権がないとみられていた戦国時代から織豊期、この時代の女性像を塗り替えることを企図したと言えるかと思います。

このようなかたちで室町・戦国時代、織豊政権期における武家の女性、および政治の頂点的位置にいた女性の軌跡を丹念にトレースすることによって高群説などに異論を唱えた点が、田端さんの中世後期の女性史の大きな意味の一つだと思います。

最後は少し駆け足になった面と、まとまりに欠ける面もありますが、高群さん、井上さんと、それに対するアンチテーゼとしての脇田さん、田端さんというかたちで対比的に示させていただきました。どうもありがとうございます。（拍手）

付記

脇田晴子については、拙稿「脇田晴子と中世女性史研究」（『歴史学研究』九六九号、二〇一八年）がある。あわせて参照されたい。